

第1回・・・総力戦と性の動員

2015年10月22日(木)



講師：早川 紀代氏 (総合女性史学会前代表)

日本の近代は日清戦争、日露戦争、第1次世界大戦、満州事変、日中戦争、そしてアジア太平洋戦争と、侵略戦争が続いた。女性は時代がへるに従い、戦争とのかかわりを深めていった。とくに日中戦争以降総力戦体制のもとで、女性や子ども、庶民は日本国家や連合軍の被害者であると同時に、アジア地域の人びとに対しては加害者であった。この問題を戦時の性政策をとおして考えてみたい。

第2回・・・15年戦争下の女性団体—女性論理の陥穽

11月27日(金)



講師：石月 静恵氏 (桜花学園大学保育学部障対受)

1931年2月制限付きながら「婦人公民権案」が衆議院を通過し、女性団体の対応は分かれた。1931年9月「満州事変」(日中局地戦争)が始まるが、それでも女性団体は、婦選団体連合委員会や母性保護法制定促進婦人連盟を結成して活動を続けていった。15年戦争下の女性団体の実態を分析するために、第1に時期区分して、その時々での活動の可能性を考える。第2に女性団体がどのような論理で活動したのか、それが戦争協力に向かうことを容認する要素となったのではないかといいことを考察する。

第3回・・・母性の国家統合—「新」良妻賢母と日本女性の「覚悟」

12月10日(木)



講師：山村 淑子氏 (近現代女性史研究者)

1925年から戦時時期に展開された文部省による女性対象の成人教育講座(婦人講座・母の講座)を手掛かりに、女性の国家統合推進過程で旧来の良妻賢母を変更し、「新」良妻賢母が提唱された理由と狙いはなんだったか。同時代を生きた昭和一桁世代の女性の歩みと現在提唱されている女性政策とを照らし合わせてみていきたい。

第4回・・・女の視点でヒロシマを考える

2016年1月14日(木)



講師：江刺 昭子氏 (女性史研究者)

広島・長崎の原爆による放射能被害は人々に十分に認識されているだろうか。被害は女にとってより深刻だ。それは福島原発事故の被曝者が抱える問題にも通じる。私の母校の前身である広島市立第一高女は学徒勤労動員で最大の犠牲者を出した。私はまた縁あって原爆作家大田洋子の晩年、共に暮らした。高女生の被爆前後の様相と大田の作品を検討しながら、女の視点でヒロシマを考えてみたい。

第5回・・・21世紀の平和とジェンダー—「女性が参加する平和」の時代へ

2月18日(木)



講師：米田 佐代子氏 (らいてうの家館長)

日本の女性は、戦争の被害体験は語るが加害責任には沈黙するといわれてきたが、両者は決して二項対立ではない。差別され、被害体験さえ語れなかった女性たちは、自らの尊厳にめざめて声を上げるようになったからこそ他者のいたみを受け止め、日本の戦争責任を自覚していったのだと思う。21世紀の国際社会は「平和構築におけるジェンダー主流化」を求めているが、その意味と可能性を日本の女性たちのあゆみから読みとってみたい。

期間 ● 2015年10月22日～2016年2月18日(毎月1回・13時半～15時半)

会場 ● 婦選会館(東京都渋谷区代々木2-21-11)

受講料 ● 7,000円(全5回。1回毎は1,500円。納入済みの受講料はお返しできません)、学生4,000円。

財団特別維持員 及び 総合女性史学会会員は6,500円。

申込方法 ● 下記申込票をFAXかメールで主催宛お送り下さい。受講料は10月1日までにお申し込み下さい。

〒振替口座No.00170-0-561022・名義(公財)市川房枝記念会女性と政治センター

企画協力 ● 総合女性史学会

主催 ● 公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センター

☎03-3370-0238 FAX 03-5388-4633 Email fitikawa.moushikomi@fork.ocn.ne.jp

お名前

ご所属

ご連絡先

メッセージ